

ボクと  
しりとりしない？



mikatuki98

「ずいぶん長い時間眠っていたような気がするなあ……」

瑠美は枕元の目覚まし時計を手にとって時間を見た。

「確か…… 昨夜ベッドに入ったのが22:55だったから…… うそ！ ラッキー♪」

瑠美はベッドの上から上半身をバネのように起こし、アナログの目覚まし時計の針を見直した。

「たった30分しか寝てないのに、この熟睡感は何？」

ニヤニヤしながら、まだ夜が続いていることに嬉しさが込み上げて来た瑠美が、再びベッドに潜りこもうとした時、誰かの声が聞こえた。

「単純だねえ」

「えっ？」

驚いた瑠美が声が聞こえてきた方に目を凝らしその正体を探していると、目覚まし時計と同じくらいの背丈のちっこい少年が、枕元に積み上げていたコミックスの上に腰掛け、こっちを向いて瑠美と同じようにニヤニヤと笑っていた。

「ちょ、ちょ、ちょっと、どきなさいよ！ そのコミックス大事なんだから。座らないでよ！」

出任せに怒ってみせた瑠美は、本当は心臓が止まりそうくらいビクビクしていたのだ。

「だから単純なんだよ。ハイ、これ！」

ヨッコラショッと言いながら腰掛けていたコミックスの上から降りたちっこい少年は、何やら丸いものを瑠美に手渡した。

「多分、君が欲しがってたものだよ。ちょっと覗いてみてみて」

手渡されたものはちょうど瑠美の瞳と同じくらいの丸い硝子玉だ。瑠美はちっこい少年に言われるままにそれを右目に近付けそっと中を覗いてた。すると玉の中では、同じように瑠美の瞳をみているもう一つの瞳が見えた。

『たすけて』

覗いた玉の中の瞳がそう言ったように感じた瑠美は、思わずゾクツとして全身から血の気が引いた。そしてゆっくりと少年の顔を見返すと、震える声で言った。

「玉……何これ？……誰かが……誰かが覗いてる…… たすけてって…… いや、いらない！  
こんなもの！！ イヤーーー！！！」

瑠美が放り出して床に転がった玉から、悲しげな歌声が聞こえて来る。

野～に 咲～く花を～ 手折っては ダメ～～～♪  
綺麗～な 薔薇だ～け 見ていなさい～～～♪  
だけど 野～に咲く～花にも 心はあるの～～～♪  
綺麗～な 薔薇と～～～ 同じようにね～～～♪  
たった一人の 花になりたい～～～♪

「瑠美…… やはり君も一人は嫌いなんだね？」

猫のように丸まりながら、玉から聞こえてくる歌声を遮るように両手で耳を塞ぎ、ベッドから

雪崩落ちて床にひれ伏して怯えている瑠美には、ちっこい少年の言葉は全く聞こえないようだ。

「だから、ボクが来たんだよ！」

よっぽど瑠美のことを知っているのか、分かった風な口ぶりのちっこい少年は自信たっぷりにそう言うと、おもむろに左手で素早く九字を切り瑠美と同じくらいの背丈に変化すると、微かに震えながら床にへばりついている瑠美の身体を、そっと抱きかかえるように起こした。次の瞬間、ちっこい少年は突然、声を張り上げて言った。

「たらこ！」

コッチを向いてと言わんばかりに瑠美の顔を覗き込む背丈の伸びたちっこい少年。

「う～ん？」

首を上げ、やっと吾に返った瑠美がふと目にした少年の唇が<たらこ>みたいだった。その途端、瑠美は今までの恐怖心も何処へやら、プツと噴出してしまった。

「たらこ、の次は<こ>だよ！しりとり」

理解不能な展開だと思いながらも、少年の言葉に釣られて瑠美は言ってみた。

「たらこ？」

「じゃあ、こども」

「ももたろう」

「うま」

「マンボウ」

「うし」

「しあわせ」

「せかいいち」

「チュッ♥」

何だか分からないままに、冷たい床の上でずっと抱擁していた二人。スモールライトだけが点けられている薄灯りの中、リリーの花柄のカーテンに二人のシルエットがぼんやりと映っている。

瑠美は少年が何者かなんて最早気にも留めなくて、目の前に近付いているすっかり背丈の伸びた少年のたらこ唇に、自分の唇を無意識のうちに重ねようとしている。少年は近付いてくる唇を見ながら何か呪文のようなものを唱えた。

「ターラン・ムーラン・ナーラン・ヌーマン・タムナム・ヌーラン・ラクシュー・マハド」

なんとその呪文こそ、瑠美がいつも寝る前に読んでいたコミックスにいずれ登場する主人公の名前だった。

少年はまるで瑠美に催眠術を掛けるように自分の名前を何度も何度も繰り返すと、瑠美の潜在意識の中に入り込んで行った。どうも瑠美はそれから毎夜、そのコミックスを読まずには眠りにつけないようになってしまったらしい。うっかりしりとりすると相手の世界に引き込まれてしまう……かもしれませんね。 了